

不規則の中の規則性

—— 現代標準英語における強変化動詞と弱変化動詞 ——*

松 瀬 憲 司

Regularity in irregularity:

Strong verbs and weak verbs in Present-day Standard English

Kenji Matsuse

(Received September 30, 2019)

In Present-day Standard English (PSE), we have two types of verbs: regular verbs and irregular verbs. The former generate their preterite and past-participial forms in terms of adding the inflectional suffix *-(e)d*, while the latter do so utilizing other methods than adding it; one such method is vowel gradation of the verb stem which was once named *Ablaut* by Jacob Grimm in the 19th century and characterizes so-called strong verbs found in Germanic languages to which English belongs. As opposed to strong verbs, the verbs with dental suffixes like *-(e)d* were called weak verbs. Then, can we say that all the previous weak verbs are identical with the present-day regular verbs? The answer is: “No.” Rather, the fact is that quite a lot of them are now regarded as irregular. However it is also true that we are not so sure about how irregular the present-day irregular verbs are. So the present paper analyzed, from the viewpoint of the history of English, the regularity and irregularity in the verbal inflection system in PSE. As the result, what have made the previous weak verbs irregular are: (1) the existence of another substantial suffix for weak verbs, i.e., *-t*, (2) vowel changes in some weak verb stems, and (3) analogical verbal formation with some patterns of strong verbs.

Key words : regular/irregular verbs, gradation (*Ablaut*), strong/weak verbs, dental suffixes, analogy

1 はじめに

現代標準英語 (Present-day Standard English: PSE) には, (1) のような, 動詞の「三基本形」と呼ばれる, 活用 (conjugation) の基盤となる形態がある。¹⁾ それらは動詞の「原形・過去形・過去分詞形」からなり, ここで言う「原形」とは「原形不定詞 (bare/plain infinitive)」を指す。従って, 三者のうち原形と過去分詞 (past participle) 形が動詞の「非定形 (non-finite form)」, 過去 (preterite) 形が「定形 (finite form)」に当たることになる。²⁾ さらにその三基本形は, (1a) の屈折接尾辞 (inflectional suffix) *-(e)d* を付加して過去 (分詞) 形を作る「規則動詞 (regular verbs)」と, (1b) の語幹母音の交替 (gradation/*Ablaut*) 等, それ以外の手法でそれらを形成する「不規則動詞 (irregular verbs)」とに分かれる。

(1) a. walk—walked—walked

b. sing—sang—sung

つまり PSE では, *-(e)d* を付加して過去 (分詞) 形を作る動詞以外はすべて「不規則動詞」と呼ばれることになる。PSE 文法における, このような形態論的見地から見た, 屈折接尾辞付加の有無による動詞形態二分法 (dichotomy) 自体は当を得たものであり, 特にそれが「学校英文法」と呼ばれる時, PSE 学習者には理解しやすく, 有益な分類法であると言っていい。

他方, ここに音韻論的側面が絡んで来ると, 事は多少複雑な様相を呈する。例えば上例 (1a) を見てみよう。この場合確かに, walk に付加される接尾辞は *-(e)d* /-(i)d/ だが, PSE での walked の発音は 2 音節の */wɔ:ki:d/ ではなく, 1 音節の /wɔ:kt/ にならねばならない。つまり意味的に「過去」を表す当該の歯茎閉鎖音 /d/ (von Mengden (2017: 91) で言うところの “an unambiguous marker of the tense value past”) が, 有声音ではなく無声音で発音される (「無声化 (devoicing)」が起こる) ことになる。これは, 規則動詞 walk が無声音

/k/で終わっていることに起因する一種の同化 (assimilation) であり、実際 -(e)d の「異形態 (allomorph)」として機能している。であるならば、それが有声音で終わっていれば、-(e)d /-(i)d/ で発音されることが当然予想される。なるほど、loved /lʌvd/ しかり、ended /endɪd/ しかりである (1 音節語としての */endd/ は発音不可能。Huddleston and Pullum (2002: 1601) 参照)。しかしここに、当該の規則動詞が無声音で終わっていても、/id/ と発音される例外的な場合がある。それは無声歯茎閉鎖音 /t/ で終わる wanted /wɒntɪd/ のような例である。これは walked の /-kt/ とは違って、/d/ が無声化して 1 音節の */wɒntt/ となった場合、上述の */endd/ と同じく、同音 /t/ の連続となる発音はできないからである。ただ、今述べたことは、形態音韻論的 (morphophonological) に見て、かなり複雑なようにも思えるが、以下に見るように実は整然としており、非常に「規則的」であると言える (Kleinedler (2018: 44-45) も参照)。

(2) a. -(e)d を付加する規則動詞が有声音で終わっている場合: /d/ と発音する。

b. -(e)d を付加する規則動詞が無声音で終わっている場合: /t/ と発音する。

c. ただし、それが /d/ と /t/ で終わっている場合のみ: /ɪd/ と発音する。

これは、PSE 学習者に「有声音・無声音」に関する知識が充分にあり、当該動詞が不規則動詞ではないという判断さえできれば、規則動詞の活用として苦もなく対処できる法則なのである。³⁾

そこで本稿では、PSE におけるこのような動詞の活用形態に潜む「(不) 規則性」について、英語史的観点から、そして PSE 学習者の視点を念頭に置いて議論していく。本稿の構成は次の通り。次節では、PSE の「規則動詞」と「弱変化動詞 (weak verbs)」との関係を取り上げ、続く 3 節では、現在の「不規則動詞」における「強変化動詞 (strong verbs)」および「変則動詞 (anomalous verbs)」について議論する。そして 4 節で全体の検討結果をまとめることにする。

2 PSE における弱変化動詞

前節を受ける形でまず、「規則動詞」から議論する。手始めに、屈折接尾辞 -(e)d のルーツを探る。

某かの、時制や動詞の定形・非定形形態を明示するための接辞を動詞に付加して過去形や過去分詞形を作る手法は、古英語 (Old English: OE) 期から見られる。そもそもこれは、以下の (3) にあるように、ゲルマン語 (Germanic languages) 特有の「弱変化動詞」形成に特徴的な手法であって、従って (西) ゲルマン語に属する OE もこれを踏襲しているに過ぎない。

(3) The salient morphological trait of these verbs [i.e., weak verbs] is the formation of the past with a dental suffix—in Germanic /d/, /t/ and occasionally /θ/. —Voyles (1992: 260)

ここで言う「歯音接尾辞 (dental suffix)」が現在の -(e)d に相当する。⁴⁾

では、OE の弱変化動詞について、Smith (2009: 119-120) と von Mengden (2017: 90-94) により、以下の (4) にまとめる。伝統的に OE では、三基本形ならぬ「四基本形 (不定詞形・一人称単数過去形・複数過去形 [二人称単数過去形語幹も同一]・過去分詞形)」を提示することになっている。⁵⁾

- | | | |
|------------------|--|-------------------------------------|
| (4) a. 'hear': | hīeran; hīerde; hīerdon; (ge)hīerd | Cf. hear /iə/—heard /ə:/—heard /ə:/ |
| b. 'ravage': | herīan; herede; heredon; (ge)hered | harry /æ/—harried /æ/—harried /æ/ |
| c. 'accomplish': | fremman; fremede; fremedon; (ge)fremed | frame /ei/—framed /ei/—framed /ei/ |
| d. 'look': | lōcian; lōcode; lōcodon; (ge)lōcod | look /u/—looked /u/—looked /u/ |
| e. 'have': | habban; hæfde; hæfdon; (ge)hæfd | have /æ/—had /æ/—had /æ/ |

上記 (4) は、von Mengden (2017) が提案する、(4a) をプロトタイプとする新しい分類法であり、Smith (2009) での伝統的分類では、(4a-c) が Class 1, (4d) が Class 2, そして (4e) が Class 3 となる (Hogg (2002) に倣い、強変化動詞の Class と区別して算用数字で表示)。Class 1・2 の折衷型である Class 3 の (4e) には、4 動詞しか属しておらず、habban の他には、libban 'live', secgan 'say', hycgan 'think' がある。

(4) よりまず、PSE -(e)d のルーツは OE の -d/-ed/-od であったことが確認される。

次に、その過去を示す接尾辞自体については、確かに PSE も OE も形態的にあまり大差ないように思われるが、OE には過去時の一人称語尾 -e や複数人称語尾 -on, そして過去分詞形に見られる、「接周辞／両面接辞 (circumfix)」と呼ばれる (ge)-d が整備されていたので (註 1) 参照)、それらが摩耗した、PSE の heard のように、定形過去形と非定形過去分詞形が「同一形態」になることはまずなく、ほとんどの場合、hīerde, hīerdon, (ge)hīerd と三者を形態上明確に区別できていたのである。⁶⁾

そして何よりも、(4a) と (4e) を見れば一目瞭然だが、PSE では所謂「不規則動詞」に類別される *hear* や *have* も、OE 期には「規則的に」-d を付加して過去形・過去分詞形を作るタイプの、言わば「規則動詞」である弱変化動詞だったことが分かる。Swan (2016⁴) には、“common” irregular verbs として、127 動詞が挙げられているが、その中には、かつて規則的な接辞付加による弱変化動詞だったものが 56 も含まれている。率にして、44% にも達する。これら旧弱変化動詞である不規則動詞は、PSE では接尾辞 -(e)d をそのまま「機械的に」付加するわけにはいかないという意味では確かに「不規則」なのだが、⁷⁾ その成り立ちは明らかに規則的であると言っていい。そして PSE 不規則動詞に含まれる、かつての規則的な弱変化動詞の特徴は、たとえば、次の 2 点が指摘できる。

(5) a. 過去形と過去分詞形が同一形態である。

b. 過去形と過去分詞形が /d/ もしくは /t/ で終わる。

繰り返すが、(5a) は、かつて付加されていた人称語尾の摩耗や過去分詞形成接周辞の一部 *ge-* の脱落 (*ge-/jə/* [OE 期] > *i-/y-/ə/* [中英語 (Middle English: ME) 期] > *ø* [近代英語 (Modern English: ModE) 期]) によるものである。また (5b) については、OE で見られた語尾 -(e)d/-od やその後の -(e)d の無声化現象を考え合わせれば、ある意味当然のように思えるが、次の点は是非とも指摘しておかなくてはならない。それは、ここで言う「/t/ で終わる」とは、付加された -d を /t/ と発音するという意味ではなく、そもそも OE には「-t」という弱変化動詞用の語尾そのものが存在したことを示している。

その語尾 -t の議論の前に、過去 (分詞) 形が /d/ で終わる不規則動詞の方を先に確認する。

- | | | |
|-----------------|--|----------------------------------|
| (6) a. 'bleed': | blēdan; blēdde; blēddon; (ge)blēded | Cf. bleed /i:/—bled /e/—bled /e/ |
| b. 'spread': | sprædan; sprædde; spæddon; (ge)spræded | spread /e/—spread /e/—spread /e/ |
| c. 'make': | macian; macode; macodon; (ge)macod | make /ei/—made /ei/—made /ei/ |
| d. 'tell': | tellan; tealde; tealdon; (ge)teald | tell /e/—told /ou/—told /ou/ |

(6a) と (6b) より、PSE ではどちらも語幹が /d/ で終わる点は共通するが、前者は長母音 /i:/ を含むのに対して (他には、*feed*, *lead*, *speed* 等がある)、後者は短母音 /e/ を含み、そして過去 (分詞) 形では、どちらも短母音 /e/ になっていることが分かる。その結果 (6b) では、三基本形全てが同一形態になってしまい、明らかな不規則性を創出している。しかし、それらの OE 形を振り返ってみると、両者ともその四基本形を通じて長母音 /e:/ や /æ:/ が現れていたのである。また逆に、Class 2 弱変化動詞 (上例 (4d) 参照) である (6c) では、OE 期には四基本形を通じて短母音 /a/ が現れていたが、その後長母音化、最終的に「二重母音化(diphthongization)」している (/a:/ → /ei/)。これらのことから、OE 期以降に起こったこのような語幹母音の「短音化 (shortening)」や「長音化 (lengthening)」が、規則的に作られていた弱変化動詞を結果的に「不規則変化動詞」に変容させた要因の一つになり得たということが十分に考えられる。

他方 (6d) は、Class 1 弱変化動詞 (上例 (4a)~(4c) 参照) だが、「語幹母音の変化も伴う」特殊なタイプであり (/e/ → /εə/)、OE 期からのその母音の長短パタン (短長長) そのものは PSE においても踏襲されている (/e/ → /ou/)。しかし、そのような母音変化があること自体が不規則性を殊更強く印象づけてしまっていると言える (他には、*sell* がこのタイプに該当する)。⁸⁾

さて、PSE 過去 (分詞) 形が -t で終わる動詞についてである。まず非常に目を引く、あの -ght の綴りが現れる一群の Class 1 弱変化動詞が挙げられるだろう。Hogg (2002: 45-46) は、このグループを「反母音変異 (unmutated/Rückumlaut)」動詞と呼んでいる。

- | | | |
|-----------------|--|---|
| (7) a. 'bring': | bringan; bröhte; bröhton; (ge)bröht | Cf. bring /i/—brought /ɔ:/—brought /ɔ:/ |
| b. 'buy': | bycgan /bydʒən/; bohte; bohton; (ge)boht | buy /ai/—bought /ɔ:/—bought /ɔ:/ |
| c. 'think': | þencan /θenʃən/; pöhte; pöhton; (ge)pöht | think /i/—thought /ɔ:/—thought /ɔ:/ |
| d. 'teach': | tæcan /tæ:ʃən/; tæhte; tæhton; (ge)tæht | teach /i:/—taught /ɔ:/—taught /ɔ:/ |
| e. 'catch': | cacchen; ca(ug)hte; —; (i)ca(ug)ht | catch /æ/—caught /ɔ:/—caught /ɔ:/ |

(7e) の *cacchen* は、ME 期にノルマンフランス語 (Norman French) の *cachier* を借入したもので、ゲルマン語由来のものではないが、OE での手法に倣って活用させたと考えられている。⁹⁾

実は、前述 (4a)~(4c) の Class 1 弱変化動詞には、過去 (分詞) 語幹母音の方がオリジナルで、その原形・現在形に「母音変異 (mutation/Umlaut)」が見られるものがあり、ゲルマン祖語 (Proto-Germanic) の段階から過去 (分詞) 形には既に、-ht /xt/ (この -h- は ME 期に -gh- の綴りになり、ModE 期には、発音されなくなった) が現れていた。これは究極的には、/gd/ や /kt/ でスタートしたものが無声化や摩擦音化により -ht に落ち

着いたのであろう。そしてその子孫語現在形では、母音変異と共にそれらオリジナルの /g/ や /k/ が口蓋化により /dʒ/ や /tʃ/ として実現している。つまり、OE 段階で既に弱変化動詞の屈折接尾辞は、-d だけでなく、異形態ではない「実体的な (substantial)」-t も存在していたと言える。

ただ、(7) のような -ght を持つ PSE 三基本形タイプの全てがかつて弱変化動詞だったわけではない。

- (8) 'fight': feohtan; feahte; feahton; (ge)fohten Cf. fight /ai/—fought /ɔ:/—fought /ɔ:/

この feohtan は、次節で議論する「強変化動詞」に属する。たまたま語幹に既に -ht '-ght' が含まれていたために、(7a), (7b) および (7c) と同一の変化型になってしまっているのである。

(7) 以外で、PSE 過去 (分詞) 形が -t で終わる動詞には以下のようなものが挙げられる。

- (9) a. 'send': sendan; sende; sendon; (ge)sended Cf. send /e/—sent /e/—sent /e/
 b. 'feel': fēlan; fēlde; fēldon; (ge)fēled feel /i:/—felt /e/—felt /e/
 c. 'learn': leornian; leornode; leornodon; (ge)leornod learn /ə:/—learnt/-ed /ə:/—learnt/-ed /ə:/
 d. 'set': settan; sette; setton; (ge)sett set /e/—set /e/—set /e/
 e. 'spit': spætan; spætte; spætton; (ge)spætt spit /i/—spat /æ/—spat /æ/

(9a) は、語幹に /d/ (-end) を含む動詞で、他には bend, lend, spend がある。¹⁰⁾ この -t 過去形の採用は、一人称単数現在形 sende との重複を避け、過去分詞形はそれに同調したためではないか。(9b) は、原形語幹では長母音が見られるが、過去 (分詞) 形ではそれが短母音になるもので、deal, keep, kneel, mean 等の -t で終わる過去 (分詞) 形のみを持つグループと、dreamt /dremt/・dreamed /dri:md/ のように、短母音を持つ -t 形だけでなく、長母音を保ったままの -ed 付加形 (所謂「規則動詞」型) も可能であるグループに分かれる。後者には、lean, leap, light 等が所属する。¹¹⁾ 他方 (9c) では、原形語幹の長母音が過去 (分詞) 形でも保持されるが、-t 形と -ed 形の両方が可能な動詞である。¹²⁾ (9d) のタイプは、(6b) 同様、三基本形全てが同一形態になるタイプであり、他に、bet, cost, cut, hit, put, quit, shut, split 等がある。これらの動詞は全て「短母音単音節語であり、-t で終わる」。¹³⁾ (9d) の settan のゲルマン祖語過去形は、*satid- だったことを考えると、-ed が付加された *settede に「語中音脱落 (syncope)」が生じたと考えられ、結果、(9a) とは逆に、一人称単数現在形の sette と同形になってしまった。過去分詞活用形の *(ge)settede 等でも同様のことが生じ、結局三形態全て同形という「不規則性」を創出したのである。

(9e) は、実は「過去 (分詞) 形が -t で終わる」タイプと言うよりも、「過去 (分詞) 形で母音が変化する」タイプと言え、dig—dug—dug や stick—stuck—stuck と同類である。ME で、speten や spiten と短母音化し、語幹にたまたま -t があったために、(9d) と同様の展開をしたのだろう。また、その stick は、

- (10) 'stick': stician; sticode; sticodon; (ge)sticod

と活用したことから、明らかに弱変化動詞 (Class 2) であった。これは、以下の ring や wear を見ると分かるように、かつての弱変化動詞の中には、その後、次節で議論する「強変化動詞」に倣った形で三基本形を作り直した動詞が少なからず存在することを物語っている (註 7) 参照)。

- (11) a. 'ring': hringan; hringde; hringdon; (ge)hringed Cf. ring /i/—rang /æ/—rung /ʌ/
 b. 'wear': werian; werede; weredon; (ge)wered wear /eə/—wore /ɔə/—worn /ɔ:/

(11b) の wear に関してだが、14 世紀の Chaucer は依然としてその弱変化型の活用を使っており、OED² (s.v. wear) によれば、強変化型活用は 16 世紀以前にはまだ稀だったらしい。

- (12) Of fustyan he wered a gepoun, [= Of coarse cloth he wore a tunic,]

—The Canterbury Tales, The General Prologue [c1375-a1400], l. 75

3 PSE における強変化動詞と変則動詞

PSE で「不規則動詞」と呼ばれているものの大半は、Grimm (1819-1837) で命名された Ablaut,¹⁴⁾ すなわち語幹母音の交替 (gradation) によって過去 (分詞) 形を作る、かつての所謂「強変化動詞」に相当する。そしてその母音交替の型は、伝統的に Class I ~ Class VII に分類され、Davis (1953⁹) は、以下の動詞を各 Class の代表として挙げている。

- (13) a. Class I: drīfan; drāf; drifon; (ge)drifen Cf. drive /ai/—drove /ou/—driven /i/
 b. Class II: cēosan; cēas; curon; (ge)coren choose /u:/—chose /ou/—chosen /ou/
 c. Class III: bindan; band; bundon; (ge)bunden bind /ai/—bound /au/—bound /au/

- | | |
|---|---|
| d. Class IV: beran ; <i>bær</i> ; <i>bæron</i> ; (ge)boren | bear /ɛə/— <i>bore</i> /ɔə/— born /ɔ:/ |
| e. Class V: giefan /jievən/; <i>geaf</i> ; <i>gēafon</i> ; (ge)giefen | give /i/— <i>gave</i> /ei/— given /i/ |
| f. Class VI: scacan ; <i>scōc</i> ; <i>scōcon</i> ; (ge)scacen | shake /ei/— <i>shook</i> /u/— shaken /ei/ |
| g. Class VII: feallan ; <i>fēoll</i> ; <i>fēollon</i> ; (ge)feallen | fall /ɔ:/— <i>fell</i> /e/— fallen /ɔ:/ |

このようにこれまでは、強変化動詞では母音交替のみが注目される傾向にあったが、von Mengden (2017: 94)は、“Strong verbs use a complex pattern of transfixes to mark tense/aspect/mood, person, and number value.”と述べ、母音交替を中心にした「貫通接辞 (transfix)」として捉え直し、(ge-)en 接周辞等も含めた屈折接尾辞 (強変化では、弱変化と違い二人称単数過去形に -e が現れる) と一括して、強変化動詞形成のための接辞と認識する試みを提案している。もちろん現在では、動詞用の屈折接尾辞は、前述の -(e)d や所謂「三単現」の -(e)s しか残されていないが、この見方は、PSE 学習者が、母音交替だけでなく、-(e)d ではない過去分詞形成語尾 -en の存在にも改めて注目できる大きな利点がある。

まず、家入 (2007: 71-72) が指摘するように、PSE 不規則動詞に見られるこのような母音交替には、かつての強変化動詞の 7 つの Class が反映しているという点においては、不規則というよりも一定の「規則性」を持つと言っている。例えば、PSE 学習者にとっては、各 Class の規則的な母音交替の型を知ることによって、原形を見ただけで、過去 (分詞) 形を想像可能になることが期待される。笠島他 (2016: 138-139) の中学 3 年生用不規則動詞変化表を使って、(13) を元に、各 Class に属する動詞を指摘し、その中でさらに、Cf. で示している PSE 変化 (に準じる) 型に当てはまる動詞を下線で表記する。

(14) **Class I:** ride, rise, write; **Class II:** fly; **Class III:** run, fight, find, win, begin, sing, swim;

Class IV: break, become, come;¹⁵⁾ **Class V:** forget, get, meet, sit, eat, see, speak;

Class VI: stand, understand, draw, mistake, take; **Class VII:** let, read, hold, sleep, blow, grow, know, throw

これを見ると、OE の Class を現在まで「忠実に」踏襲しているのは、Class I だけであり、その他の 6Class では、「新たな型」に移行した動詞が多々あることが分かる。例えば、以下のような動詞である。

- | | |
|---|--|
| (15) a. Class II: flēogan ; <i>flēag</i> ; <i>flugon</i> ; (ge)flogen | Cf. fly /ai/— <i>flew</i> /u:/— flown /ou/ |
| b. Class III: singan ; <i>sang</i> ; <i>sungon</i> ; (ge)sungen | sing /i/— <i>sang</i> /æ/— sung /ʌ/ |
| c. Class IV: brecan ; <i>bræc</i> ; <i>bræcon</i> ; (ge)brocen | break /ei/— <i>broke</i> /ou/— broken /ou/ |
| d. Class V: gietan /jietən/; <i>geat</i> ; <i>gēaton</i> ; (ge)gieten | get /e/— <i>got</i> /ɔ:/— got(ten) /ɔ/ |
| e. Class VI: standan ; <i>stōd</i> ; <i>stōdon</i> ; (ge)standen | stand /æ/— <i>stood</i> /u/— stood /u/ |
| f. Class VII: lætān ; <i>lēt</i> ; <i>lēton</i> ; (ge)lāten | let /e/— <i>let</i> /e/— let /e/ |

しかしながら、(13) と (15) をよく比較すると、Class VII を除いて、PSE では異なる型を持つに至った動詞も OE 期には間違いなく「全く同じ」母音交替の型だったことがまず判明する。¹⁶⁾

次に両者間の異同を見ていくと、(13b) と (15a) では、PSE 過去分詞の二重母音 /ou/ (OE の -o-) の部分しか共通点がなくなってしまう。 (13c) と (15b) からは、bind は複数過去形の *bundon* から *bound* を採用し (/u/ が長音化され /u:/ になり、大母音推移以降 /au/ となった)、他方 sing は複数過去形の *sungon* ではなく一三人称単数過去形 *sang* の方を選んだことが分かる。 (13d) と (15c) では、全く違う型になってしまっているが、現在ではもう使われなくなった **brake* という形態もあったので、その意味では、OE 期の過去形 *bræc(on)* がある時期までは継承されていた点も確認できる。 (13e) と (15d) に関しては、実は PSE の give, get は OE 継承形ではなく、「古ノルド語 (Old Norse)」 *gefa* [> ME *given*], *geta* [> ME *geten*] からの借用形であった。これらは ME 期には、OE 継承形 *yiven*, (bi)*yeten* と共存し、その後置き換わったが、give は Class V の型を踏襲したものの、get は違う型を採用した。Class VI に属する (15e) *stand* では、過去形母音 (OE の -ō-) が過去分詞形にまで拡大しているが、ME 期には *stonde* という異形も現れ、オリジナル交替型の過去分詞 *stonden* も存在していたことがその後の変更に影響したかもしれない。そして Class VII については、PSE での短母音 /e/ の出現が特徴的で、(13g) の A—/e/—A 母音型と (15f) の A—/e/—/e/ 母音型 ((15f) では、たまたま A が /e/ になっているにすぎない) に分かれる。

さらにこの Class VII には sleep が属しているが、実は OE では、以下の (16a) のように活用していた。

- | | |
|--|---|
| (16) a. 'sleep': slāpan ; <i>slēp</i> ; <i>slēpon</i> ; (ge)slāpen | Cf. sleep /i:/— <i>slept</i> /e/— slept /e/ |
| b. keep': cēpan ; <i>cēpte</i> ; <i>cēpton</i> ; (ge)cēped | keep /i:/— <i>kept</i> /e/— kept /e/ |

従ってこの sleep は、本来ならば **sleep—sleep—sleep* となってもよさそうなのだが (hurt の例から、長母音を持つ動詞でも三形態同一はあり得るので、問題はなかったはずだし、強変化動詞なので -(e)d 付加によ

る音韻変化も無関係。註 13) 参照), (16b) の keep と同一形態 -eep を持つが故に, 「類推 (analogy)」により弱変化型に移行したと考えられる。このように OE 期以降, 強変化動詞から変化型を衣替える動詞も現れてきたのである (弱変化動詞から強変化動詞型への変更については註 8) 参照)。

結論として, PSE 不規則変化動詞に見られる旧強変化動詞は, OE 期の 7Class をそっくりそのまま継承しているわけではないが, それらをベースにして新たなパターン, 例えば, (15c)~(15f) のような A—B—B 母音型をも生み出しながら, やはり一定の「規則性」を維持していると言っていいだろう。

そして, OE 期から不変に不規則を貫き通してきた動詞が, 所謂「変則動詞」である。

- | | | |
|---------------|--------------------------------------|---|
| (17) a. 'be': | bēon/wesan; wæs; wæron; (ge)bēon | Cf. be /i:/—was /æ/, were /ə:/ —been /i:/ |
| b. 'will': | willan; wolde; woldon; *willen | will /i/—would /u/ |
| c. 'do': | doon; dyde; dydon; (ge)doon | do /u:/—did /i/—done /ʌ/ |
| d. 'go': | gān; ēode; ēodon; (ge)gān/(ge)gangen | go /ou/—went /e/—gone /ɔ:/ |

周知のごとく (17a) の be は, OE 期から, 現在形においても, eom, is, eart (sg.)/sind (pl.) 'am, is, are' と別系統の活用が用意されていた。その起源が 3 つの動詞系列 (b- 系, w- 系, 母音/s- 系¹⁷⁾) の合体であったからである (家入 (2007: 84))。 (17b)~(17d) からは, これらは PSE の show—showed—shown のような弱変化 (過去形の -d) と強変化 (過去分詞の (ge)-en) の折衷型であると分かる (註 8) 参照)。また, 基本的には A—B—A 母音型だったものが, (17b) を除いて PSE では, A—B—C 母音型になっている。特に (17d) だが, *OED*² (s.v. go) が, “A Com[mon] Teut[onic] [= Germanic] defective v[er]b, perh[aps] originally existing only in the pres[ent]-stem, though a str[ong] pa[st] p[artici]ple occurs in some of the Teut[onic] lang[uage]s.” と指摘するように, go は現在形のみ「欠損 (defective) 動詞」だったために, 弱変化型の過去形が「補充 (suppletion)」されたのである。そしてそれがさらに ME 期になって, ME での発達形 yode (< ēode/-on) との競合を経て, wenden 'to travel/go' の過去形 went によって再度補充された。 (17a) の be を除けば, これは不規則の極みと言っていいだろう。

4 まとめ

以上の議論より, PSE の規則動詞および不規則動詞に関して, 次のように言える。

- (18) 規則動詞は OE の弱変化動詞の系譜に属するが, 語幹母音を変更せずに歯茎音接尾辞 -(e)d のみを付加する操作に特化されており, かつて許容された語幹母音変化や実体的接尾辞としての歯茎音接尾辞 -t を持つ弱変化動詞は不規則変化動詞に位置付けられている (ただし, -(e)d の「異形態としての /t/」は, 生起する音韻環境により, 自然な形で許容されている)。従って, 所謂不規則変化動詞には, かつての強変化動詞と変則動詞だけでなく, かなりの数の弱変化動詞が含まれていることになる。さらに, 不規則変化動詞の母音交替の型は, OE 期の強変化動詞のパターン全てがそのまま踏襲されているわけではないが, 元来十分に規則的であり, それらは機械的に -(e)d を付加しないという意味においてのみ不規則であるに過ぎない。

いずれにせよ, そもそも動詞の活用は, 印欧祖語やゲルマン祖語の時代に, 過去形や過去分詞形を原形 (や現在形) から形態的に区別する必要性から生じたものだから, それが規則的であれ, 不規則的であれ, 無くしてはならないものであったと想像される。OE では, それがある意味整然と, かなり「規則的に」実行されていたと言えるが, その後の英語史の「総合から分析へ」の奔流に飲み込まれ, PSE では, 活用に大いなる多義性 (ambiguity) が生じてしまった。その最たるものが, let, put, set 等の三基本形全て同一形態である動詞の存在であろう。これは, 現在形 (三単現を除く) と過去 (分詞) 形の形態的区別を放棄しているに等しく, しかし, それもまた PSE として十分に容認されているということは, 原理的には既に, 原形とほとんど同一の現在形 (be 動詞を除く) と過去形を, さらに過去形と過去分詞形を形態的に区別する必要性 (活用の存在意義) が事実上消失していることを如実に物語っている。従って, PSE の動詞活用は, 文構造上義務的な主語の存在のために, 今やそれが無くても何の支障もない, 「権威主義的余剰物」に成り果てた「三単現の -(e)s」を捨てさえすれば, 理論上, (非定形の不定詞・過去分詞形をも兼ねる) 定形のデフォルト形と非定形の -ing 形のみで事足りるのである。

註

* 本稿は、2019年9月14日に熊本大学で開催された「熊本言語学談話会（KLC）」で筆者が発表した内容を加筆修正したものである。当日、熊本県立大学名誉教授三木悦三先生には貴重なご助言をいただいた。この場をお借りして感謝申し上げます。

- 1) PSEと同じ西ゲルマン語である現代標準ドイツ語では、*drei Grundformen der Verben*と呼ばれており、(i)のように三者が形態上整然と区別されている。特に過去分詞形に見られる、接頭辞と接尾辞でサンドイッチ構造を形成する *ge-* *-t* は、「接周辞（circumfix）」と呼ばれる。

(i) a. *lernen—lernte—gelernt* ‘learn—learned/lerant—learned/learnt’

b. *-en — -te — ge- -t*

- 2) ただし PSE の場合、原形は、三人称単数形を除く定形現在形と「同一」であることに注意しなくてはならない（*be* 動詞が例外。直説法と仮定法でも形態同一現象は起こる。松瀬（2018）での議論を参照）。また一部の動詞では、定形過去形とも同一形態となる場合がある（例えば、*set* や *put*）。

なお、非標準形では、非定形過去分詞形として定形過去形が使われたり（(iia)）、逆に定形過去形として非定形過去分詞形が使われたりする（(iib)）ことは日常茶飯事である。

(ii) a. We’ve never **wrote** a letter complaining about anything before now, have we?

b. Ronnie **done** that; don’t blame me!

—McCarthy (2017: 78)

これは、PSE においても、定形過去形と非定形過去分詞形が同一形態の動詞は珍しくない（と言うより、規則動詞は全て同一である）ので、原理的に見て、定形過去形と非定形過去分詞形を形態的に区別する必要性がないことを明確に示している。たまたま PSE の一部の動詞で区別するように規定されているに過ぎないのである。

そして McCarthy (2017: 78) が続けて次のように言うことに筆者は全面的に賛同したい。

(iii) If you speak a dialect that uses such forms, don’t be ashamed or feel you have to change. *No dialect is inherently better than any other.* ... The important thing is to be aware of dialect features and to use them in *appropriate* circumstances and to orientate towards the established standard when you feel it’s more *appropriate*. (強調は筆者)

- 3) そういう意味で、この有声対無声の音声対立に関しては、中学校段階できっちり指導する必要がある。小学校で既に日本語の「清音対濁音」について学習しているので、そこまで難解ではないはずだが、前提として「母音対子音」についての理解が不可欠であることは言うまでもない。
- 4) この歯音接尾辞に関して、Smith (2009: 119) は、“a Germanic peculiarity whose origins have been much disputed. Most scholars are of the opinion that the dental suffix derives from a compounding of the root lexeme with the verb ‘do’ (OE *dōn*)” と述べている。また、Baugh and Cable (2013⁶: 57) は、“an attempt has been made to trace these forms [i.e., verbs with dental suffixes] to a type of verb that formed its stem by adding *-to-* to the root.” と指摘している。
- 5) OE で四基本形を提示するのは、弱変化動詞では判然としないが、後で見るように、強変化動詞では、明らかに一三人称過去単数形と過去複数形の形態が異なる場合があるからである。
- 6) 過去分詞は「形容詞」であるので、形容詞の語形変化表に従い、強変化では、女性単数対格形と複数男女性主格および対格形で語尾 *-e* をとり、弱変化では、女性単数主格形と中性単数主格および対格形で語尾 *-e* をとる。語頭の *ge-* はオプションだから、それが明示されない場合、定形の一三人称過去形と同一形態になる可能性があった。
- 7) この点、Kretzschmar, Jr. (2018: 76) が⁸、“The good thing about Old English weak verbs for Modern English readers is that they add *-(e)de* for preterite and *-ed* for the past participle without changing the verb stem, quite similar to how we do it in Modern English.” と述べているのは、特に下線部など明らかに間違っており、また、MacArthur, Lam-McArthur, and Fontaine (2018²: s.v. *weak verb*) での“The terms [i.e., weak verbs and strong verbs] are usually placed in grammars of Modern English by *regular* verbs (in place of weak verbs) and *irregular* verbs (in place of strong verbs).” という記述も全く不十分であると言わざるを得ない。
- 8) この /d/ で終わる不規則動詞のカテゴリで特異な例を以下の (iv) に挙げる。

(iv) a. ‘hide’: hȳdan; hȳdde; hȳddon; (ge)hȳdded Cf. hide /ai/—hid /i/—hidden /i/

b. ‘show’: scēawian; scēawode; scēawodon; (ge)scēawod show /ou/—showed /ou/—shown /ou/

(iva), (ivb) 共に、PSE 過去形は OE 弱変化形を踏襲していると言っているが、過去分詞形は強変化動詞の過去分詞形成語尾 *-(e)n* に置き換わっている。Wiktionary (s.v. *hide* & *show*) によれば、17 世紀の『欽定訳聖書』では、過去分詞として、*hid* と *hidden* の両方が使われており、*shown* は 19 世紀以前にはあまり使われていなかったらしい。この強変化語尾の採用については、*show* の場合、過去形には *shew*（現在は非標準形）もあったので、*grow—grew—grown* や *blow—blew—blown* 等の類推から創出されたと考えられる。

- 9) 意味的に類似していた, OE の *læccan* /læʃən/ 'to grasp, take hold of, catch, seize' の過去形 *læhte* に倣い, *caht(e)* が作られたのである。しかし面白いことに, 手本となったその *læccan* 'to latch' は, PSE では, **laught* ではなく, 規則的に *latched* と活用するようになってしまっている (*Wiktionary* (s.v. *catch & latch*)). ME の過去 (分詞) 形に関しては, (7e) 以外にも様々な綴りがあった。
- 10) この中で, *lend* は, OE 期には以下の (v) のような弱変化動詞だった。
- (v) 'lend': *lænan*; *lænde*; *lændon*; (ge)*læned* Cf. *lend* /e/—*lent* /e/—*lent* /e/
- つまり, 元々原形語幹に -d は存在していなかったのである。これは「余剰の (excrement) / 音便の (euphonic) / 侵入の (intrusive) /d/」と呼ばれ, *sound*, *round*, *thunder*, *kindred* にも見られるものである (*Wiktionary* (s.v. *lend*); Upward and Davidson (2011: 39)). 従って, *lend* は本来なら **len*—*lend*—*lend* となるべきところが, 同形の -end 動詞に倣い, -t 過去 (分詞) 形を採用したのだろう。
- 11) この中で, (9b) のように, /i:/ → /e/ の短母音化に伴って, 形態も変化するの *keep/kept*, *kneel/knelt*, *light/lit* の 3 動詞である。他は *deal/dealt* のように, 綴りを変えず -t を付加して発音だけが変化する。
- 12) 他方, 原形語幹の短母音が過去 (分詞) 形でも保持され, -t 形と -ed 形の両方が可能な動詞として, *smell* (*smellt/smelled*) と *spill* (*spillt/spilled*) を挙げることができる。
- 13) これらの動詞のうち, *cost*, *cut*, *put*, *quit*, *split* は ME 期以降に現れ, *cost* や *quit* は明らかにフランス語からの借用である。さらには, 現在は短母音ではなく長母音になっているが, 同じくフランス語から借入した *hurt* も (9d) 型であり, ME 当時は /hurt/ と発音されていたと思われるので, 「短母音単音節語で, -t で終わる」という特徴は満たしていたと言える。また, *bet* と *quit* については, -ed 付加形の *betted*・*quitted* も可能である。
- 14) *Deutsche Grammatik*, 4 Bde., Göttingen: Dieterich Verlag.
- 15) Davis (1953³: 30) には, “*Cuman* is irregular.” とあり, 以下のように活用する。
- (vi) 'come': *cuman*; *cōm*; *cōmon*; (ge)*cumen* Cf. *come* /ʌ/—*came* /ei/—*come* /ʌ/
- 確かに, Class IV 動詞としては特異な変化型だと言えるが, なぜ PSE で原形と過去分詞形が同じ *come* になっているのかは, これを見ると十分納得できる (/u/ は後に /ʌ/ になった)。
- 16) Class III については, 元々 (13c) 以外にあと 2 つ (vii) のような下位区分があった (Davis (1953³: 29)).
- (vii) a. 'help': *helpan*; *healp*; *hulpon*; (ge)*holpen* Cf. *help* /e/—*helped* /e/—*helped* /e/
- b. 'run': *i(e)man*; *arn*; *urnon*; (ge)*urnen* *run* /ʌ/—*ran* /æ/—*run* /ʌ/
- しかし, (vii a) の *help* は弱変化動詞型に移行してしまっているし, (vii b) の *run* は過去 (分詞) 形の母音 /u/ (これは後に /ʌ/ になった) が原形にまで拡張されており, さらに「母音 + /r/」が「音位転換 (metathesis)」を起こしている。本来なら, **irn/urn*—*arn*—*urn* とでもなっていたのかもしれない。
- 17) 接続法 (subjunctive mood) 現在形にも, 単数用に *sȳ*, 複数用に *sȳn* という s- 系の形態があった。

参考文献

- Baugh, A. C. and Cable, T. 2013. *A History of the English Language*. 6th edition. London: Routledge.
- Coote, L. A. (ed.) 2012. *The Canterbury Tales*. New edition. Ware: Wordsworth Poetry Library.
- Davis, N. (rev.) 1953. *Sweet's Anglo-Saxon Primer*. 9th edition. Oxford: Clarendon Press.
- Hogg, R. 2002. *An Introduction to Old English*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.
- Huddleston, R. and Pullum, G. K. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- 家入葉子. 2007. 『ベーシック英語史』 東京: ひつじ書房.
- 笠島準一 他. 2016. *New Horizon English Course 3*. 東京: 東京書籍.
- Kleinedler, S. 2018. *Is English Changing?* London: Routledge.
- Kretschmar, Jr., W. A. 2018. *The Emergence and Development of English: An Introduction*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- MacArthur, T., Lam-McArthur, J., and Fontaine, L. (eds.) 2018. *Oxford Companion to the English Language*. 2nd edition. Oxford: Oxford Univ. Press.
- 松瀬憲司. 2018. 学校英文法における「法」について—英語史的観点から—. 西岡宣明・福田稔他 (編) 『ことばを編む』, 399-409. 東京: 開拓社.
- McCarthy, M. 2017. *English Grammar: Your Questions Answered*. Cambridge: Prolinguam Publishing.
- Murray, J. A. H. et al. (eds.) Prepared by J. A. Simpson & E. S. C. Weiner. 1989. *The Oxford English Dictionary*. 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.
- Smith, J. J. 2009. *Old English: An Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

- Swan, M. 2016. *Practical English Usage*. 4th edition. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Upward, C. and Davidson, G. 2011. *The History of English Spelling*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- von Mengden, F. 2017. (Old English) Morphology. In L. J. Brinton and A. Berg (eds.), *The History of English*, Vol. 2, *Old English*, 73-99. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Voyles, J. B. 1992. *Early Germanic Grammar: Pre-, Proto-, and Post-Germanic Languages*. San Diego: Academic Press.
- Wiktionary, the Free Dictionary*. <https://en.wiktionary.org/> (2019/8/12 閲覧).